様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６８０

研究課題名（和文）評価者・学習者・意見文の分析に基づく評価の検証：作文の自律学習支援を目指して

研究課題名（英文）Assessment of writings based on the analysis of assessors, learners, and opinion essays: Toward the support of autonomous learning for Japanese essay writing

研究代表者
伊集院　郁子（IJUIN, Ikuko）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：２０４３６６６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、意見文の良し悪しを決定づける要因について、評価者、執筆者、意見文の観点から多角的に分析し、評価の高い意見文や評価が分かれる意見文の特徴等を明らかにした。また、分析によって得られた知見を活かし、作文評価用ルーブリック及び作文教材を開発した。
作文教材は、アカデミック・スタイル、結束性を高めるための言語表現、説得力を向上させるため内容構成の３つの観点を主軸としたもので、大学教員から収集した評価データに基づいて開発したルーブリックも備えている。作文コーパスや評価データを用いた実証的研究の成果が活かされており、留学生を対象とするアカデミック・ライティング教育・学習にも貢献できるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学生の「書く力」の養成は喫緊の課題となっており、各大学では初年次教育としてアカデミック・ライティング力を向上させるためのトレーニングを行っている。本研究では、大学生（日本人学生及び留学生）による意見文を収録したコーパスや大学教員によるライティング評価の実証的データに基づき、意見文を高得点群、中得点群、低得点群等に分類し、意見文のレベルや執筆者の母語、評価者の専門と評価の特徴との関係を分析すると同時に、ライティング力の向上に必要なスキルを考察した。
これらの研究成果に基づき、作文評価用ルーブリック及び作文教材を開発し、日本の高等教育機関で学ぶ学習者に対するライティング教育に研究成果を還元した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyzed the factors that determine the quality of an opinion essay from the perspectives of the assessor specialties, writer categories, and essay levels to reveal the characteristics of highly assessed essays, essays whose assessments were mixed, and so on. We also developed an essay-writing rubric and educational materials for essay writing based on the findings obtained from the analysis.
The developed teaching material focuses on academic style, language expression to enhance cohesiveness, and content and organization to improve persuasiveness. It also includes a rubric developed based on assessment data collected from university faculty. The results of empirical research with opinion essay corpora and evaluation data were utilized in developing materials. These can contribute to the education and learning of Japanese academic writing for international students.

研究分野：日本語教育

キーワード：アカデミック・ライティング　留学生　大学生　作文評価　評価の観点　ルーブリック　教材開発　アカデミック・スタイル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、「書く力」の養成は大学が総力を挙げて取り組まなくてはならない重大な問題であるとの指摘が見られるが（読売新聞 2016 年 7 月 8 日）、大学生の大学入学までの学習環境や母語、言語能力は多種多様であり、ライティングの指導や評価は常に困難を伴う。

大学への進学を目指す留学生を指導する日本語教育機関では、アカデミック・ライティング指導の準備段階として、中級レベルに達した段階から「意見文」の指導が始まり、自分の「主張」とそれを支える「論拠」を論理的に組み立てて文章を書く練習を行っている。しかし、大学入学までにどの程度のレベルの文章を日本語で書ければ良いのか、具体的な目安が共有されているわけではなく、大学入学後の文章表現指導も初歩的な指導から始まることが多い。特に海外の日本語教育機関では、作文教育は添削・評価の負担が大きいことから避けられる場合もあり、日本語で書く力の向上は，自助努力に負う側面もある。

今後、日本の大学は留学生が占める割合が高くなることが予想されるため、大学進学を目指す留学生が日本語で書く力について、大学教員の評価の観点や学習者（書き手）側の要因、書かれた文章そのものの特徴等から、多角的にその実態を捉えておく必要がある。また、学習者が自身の作文を評価し、不足している点を把握した上で自律的に日本語作文の学習を進めるための支援ツールが提供できれば、大きな意義があると考える。

２．研究の目的

本研究では、大学生が執筆した日本語意見文を対象に、その評価を左右する要因について、評価者要因と学習者（書き手）要因と意見文の特徴という 3 つの観点から多角的に分析した上で、分析結果に基づいて意見文の評価用ルーブリックを作成し、自律学習を助けるツールの一つとして提供することを目的とする。大学進学を目指す留学生の「日本語で書く力」について多角的に捉え、学習者自身が自律的に日本語作文の学習を進めるための支援ツールを開発することによって、アカデミック・ライティングの教育・学習に貢献することを目指す。

３．研究の方法

研究は、①意見文の分析、②評価結果の分析、③①と②に基づき、評価用ルーブリックの作成、④ルーブリックの試用及び改訂、⑤ルーブリックを含む成果物（作文教材『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』）の開発という流れで行った。

具体的手順は、以下のとおりである。

① 日本語・韓国語・中国語・英語を母語とする大学生による「日本語意見文」30 編と大学教員 44 名による「意見文の評定結果」に基づき、評定結果のレベルごとに、意見文を内容・構成・言語・形式面から特徴づける。内容や構成に関しては，談話分析の手法を用いた質的分析に加え、「KH Coder」（https://khcoder.net/）（開発者：樋口耕一氏）による計量テキスト分析も行う。

② 大学教員による「評価コメント」のコーディングを行い、評価コードを抽出する。その際に、機械による言語解析だけでは明らかにできない評価項目も網羅的に洗い出し、その特徴を分析する。

③ 上記②で洗い出した評価項目を精査し、コレスポンデンス分析や重回帰分析等によって評価項目を集約させ、評価用ルーブリックの試案を作成する。さらに、作成したルーブリックを 3 名の研究メンバーで試用し、評価が一致しない点や解釈にずれが生じた点について、文言の修正や点数の調整を行う。

④ 調整したルーブリックを用い、日本の大学機関で日本語教育に携わる教員に対して意見文の評価を依頼し、評価結果の分析を行う。分析結果に基づき、最終調整を施し、「小論文評価用ルーブリック」として完成させる。

⑤ 上記④の成果物を含め、アカデミック・ライティング用の教材としてまとめる。
※成果物については、当初は本研究の研究分担者である李在鎬氏が開発した「jWriter:学習者作文評価システム」（https://jreadability.net/jwriter/）と連動させてルーブリックを公開することを検討していたが、十分な試用や検証を経たうえで公開する必要があると判断し、jWriter との連動については継続課題とすることとした。

４．研究成果

主たる研究成果については、伊集院・李・小森・野口（2020）、Ijuin（2020）、伊集院・髙野（2020）で詳細を報告している。以下では、これらを引用しつつ、(1) 評価研究の結果、(2) 小論文評価用ルーブリックの開発、(3) 作文教材の開発の順に概要を報告する。

(1) 評価研究

伊集院・李・小森・野口（2020）は、大学教員による意見文評価の様相を計量的、実証的に分析するために、日本語教員と人文社会系の専門教員各 22 名が意見文 30 編に対して付与した評

定値及び評価コメント（「良い点」及び「悪い点」に関するコメント）を分析したものである。共起ネットワークによる評価コメントの全体的特徴の把握、評価コメントのコード化、コレスポンデンス分析という手順で分析した結果、以下の点が明らかになった。

- 大学教員が「よい」と評価する際の決定要因は、意見文のレベルや執筆者の母語、評価者の専門の違いに関わらず【内容】であり、その後に【構成】または【言語】が続く。
- 30 編中の上位 10 編の意見文に対する評価コメントは【内容】、【構成】、【言語】、【形式】の良い点、上位 11 位から 20 位の 10 編に対するコメントは【内容】及び【構成】の悪い点と対応関係が見られたことから、【内容】及び【構成】が「よい」意見文か否かを分ける観点として重要である。
- 下位 10 編の意見文については、【言語】と【形式】の悪さとの対応関係が見られ、【内容】や【構成】が評価の観点として大きく関わるのは、言語能力が一定レベル以上に達している場合に限られている。
- 日本語教員も専門教員も【内容】を重視しているが、【言語】については日本語教員の方がより多く着目している。英語教員と専門教員について分析した Shaw & Weir（2007）の指摘と同様に、語学を教える教員は、言語に着目してその問題点について詳しくコメントする傾向があると考えられる。

（2）小論文評価用ルーブリックの開発

本研究の成果物の一つであるルーブリック（伊集院・髙野 2020, pp.162-163）の作成プロセスについては、Ijuin（2020）にまとめられている。

ルーブリックとは「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」であり、課題・評価尺度（達成レベル・成績評価点）、評価観点（課題が求める具体的なスキルや知識）、評価基準（具体的なフィードバック内容）からなるものである（スティーブンス他 2014）。本研究では、スティーブンス他（2014）が定義する「課題」を「小論文：与えらえた課題に関し、主張（意見・立場・提案など）を根拠を挙げて論理的に伝えることを目的とする文章」とし、「評価尺度」に大学教員から得られた 5 段階評定値、「評価観点」に評価コメントから抽出したコード、「評価基準」に評価コメントの共起ネットワーク分析によって抽出した語や表現を利用し、現実の評価データに即したルーブリックの試案を作成した。

大学教員による評価コメントは、「良い点」が 40,242 字、「悪い点」が 64,815 字で、計 105,057 字（65,088 語）からなるものである。評価観点を作成する際には、これらのすべてをコンテキストに基づいて解釈し、意味的まとまりに切片化してコード化する作業を行った。コードの解釈が難しい場合には、評価対象となった意見文自体も参照して意味的コードを生成していき、さらにいくつかのコードからカテゴリーを生成する作業を繰り返した。最終的に生成されたコードの延べ数は、5,798 コード（「良い点」2,675 コード、「悪い点」3,123 コード）で、33 コード、10 カテゴリーに分類された。(コード化の手続きに関する詳細は、伊集院・小森・奥切 2018 を参照のこと。)その後、伊集院・李・小森・野口（2020）の研究結果や重回帰分析による検討を経て、表 1 に示す項目からなるルーブリックを作成した。

なお、最終版の完成に至るまでには、研究メンバー3 名で 6 編の作文を評価し、評価が一致しなかった点について、評価基準の文言のわかりにくさの解消や評価尺度の調整を行い、再度評価を行うプロセスを繰り返した。さらに、日本の大学で日本語教育に携わる教員 9 名による試用結果の分析を経て、評価基準と配点に調整を施した。

表 1　ルーブリックの評価の観点および観点の説明

評価の観点		観点の説明
内容構成	主張	主張（課題に対する書き手の回答）が容易に伝わるか。
	根拠	主張を支える根拠に説得力があるか。
	論理構成	全体の論理構成が明確で、段落間、段落内の情報が整理されているか。
言語表現	正確さ	日本語表現（文型、文法、語彙、表記）に誤用がないか。
	適切さ	アカデミック・ライティングにふさわしい表現（「ふつう体」、「かたい表現」、多様な表現）が適切に用いられているか。
形式	書式	書式など（フォーマット、文字数、原稿用紙の使い方など）の指定が守られているか。
その他	加点対象	独創的な視点が盛り込まれていて読み手の興味を引くなど、書き手の意欲や工夫が伝わる。
	減点対象	タイトルが本文の内容と合っていない、手書きの場合に極端に読みづらいなど、読み手を混乱させる要因がある。

（3）作文教材の開発

教材作成に際しては、これまでの研究で明らかになった以下のような点に鑑み、これらの問題を改善するためのポイント解説や学習者が作成しがちな不自然な文章の例とその改善例、練習問題等からなる教材とした。（成果物は、伊集院・髙野 2020 を参照のこと。）

＜研究成果と教材での扱いの例＞

- 大学教員の評価の低い意見文あるいは評価が分かれる意見文では、文体の混用や特定の言語要素の多用が問題視されている。（伊集院 2017）
  →アカデミック・ライティングにふさわしいスタイルについて、文末の「ていねい体」と「ふつう体」の違いのみならず、指示表現、接続表現、副詞、助詞、名詞、動詞等の「やわらかい表現」と「かたい表現」の違いの意識づけも行う。また、「文末のバリエーション」についても取り上げる。
- 評価の低い意見文には最後の段落に至るまで主張が明らかにならないもの、主張に対する譲歩的な記述が長いもの、複数の主張が唐突に提示されるものがみられる。また、個人的経験談や好みなど、主観的と受け取られる根拠が散見される。（伊集院 2017）
  →説得力のある論理展開、客観的な根拠としての引用等について、具体例とともに分析的に学べるようにする。
- 評価の低い意見文は【言語】と【形式】の悪さとの対応関係が見られ、【内容】や【構成】が評価の観点として大きく関わるのは、言語能力が一定レベル以上に達している場合に限られる。（伊集院・李・小森・野口 2020）
  →Step1・2・3 と段階をおって、言語から内容・構成に焦点を移しながらスパイラル式に学んでいけるような構成にする。

最終的な成果物の主な特徴としては、①ステップごとに「アカデミック・スタイル」、「言語表現」、「内容・構成」の 3 つの観点から段階を追って学べること、②実例から考え、その改善例から学ぶことで自身で推敲する力を鍛えられること、③幅広いテーマとトピックで知識を深め、論理を組み立てる力をつけられること、④教師用の評価用ルーブリックに加え、学習者用のチェックリスト、50 音順スタイル対照リストが資料として付属している点が挙げられる。

＜引用文献＞

伊集院郁子（2017）「作文と評価―日本語教育的観点から見たよい文章―」李在鎬（編）『文章を科学する』(pp. 38-57)ひつじ書房

伊集院郁子・小森和子・奥切恵（2018）「大学教員によるライティング評価の観点を探る」石川慎一郎（編）『Learner corpus studies in Asia and the world』Vol. 3, 159-176.

伊集院郁子・髙野愛子（2020）『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』アスク出版

伊集院郁子・李在鎬・小森和子・野口裕之（2020）「評価コメントに見られる意見文評価の様相―共起ネットワーク及びコレスポンデンス分析に基づく考察― 」『第二言語としての日本語の習得研究』23, pp.26-43.

スティーブンス, ダネル・レビ, アントニア（2014） 佐藤浩章（監訳）井上敏憲・俣野秀典（訳）『大学教員のためのルーブリック入門』 玉川大学出版部

読売新聞 2016 年 7 月 8 日別刷特集「大学の実力 2016」

Ijuin, Ikuko. (2020). Developing an Essay-Writing Rubric for Learners of Japanese: Based on the Analysis of Writing Assessment by Japanese University Faculty. In S. Ishikawa (Ed.), *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 5, Kobe University, 79-94.

Shaw, S.D. & Weir, C.J. (2007). *Examining writing: Research and practice in assessing second language writing*. Cambridge University Press. (Volume 26, Studies in Language Testing, edited by M. Milanovic, & C. Weir)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　13件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 伊集院郁子・李在鎬・小森和子・野口裕之	４．巻 23
２．論文標題 評価コメントに見られる意見文評価の様相 ―共起ネットワーク及びコレスポンデンス分析に基づく考察―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	６．最初と最後の頁 26-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ijuin, Ikuko	４．巻 5
２．論文標題 Developing an Essay-Writing Rubric for Learners of Japanese : Based on the Analysis of Writing Assessment by Japanese University Faculty.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Learner Corpus Studies in Asia and the World	６．最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012491	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小森和子・伊集院郁子・李在鎬	４．巻 14(1)
２．論文標題 日本語学習者の作文における自動評価と教師評価の比較	５．発行年 2022年
３．雑誌名 明治大学国際日本学研究	６．最初と最後の頁 41-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊集院郁子・小森和子・奥切恵	４．巻 3
２．論文標題 大学教員によるライティング評価の観点を探る	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Learner corpus studies in Asia and the world	６．最初と最後の頁 159-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81010125	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 李在鎬	4．巻 40(1)
2．論文標題 書くことを支援する自動評価システム「jWriter」（特集AIやICTが変える言語教育）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本語学2021年冬号	6．最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野口 裕之、大隅 敦子、熊谷 龍一、島田 めぐみ	4．巻 17
2．論文標題 CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の日本語教育への適用可能性に関する基礎研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本テスト学会誌	6．最初と最後の頁 9-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24690/jart.17.1_9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 LEE, Jae-ho and HASEBE, Yoichiro	4．巻 5
2．論文標題 Quantitative analysis of JFL learners' writing abilities and the development of a computational system to estimate writing proficiency.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Learner Corpus Studies in Asia and the World	6．最初と最後の頁 105-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012493	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 李在鎬	4．巻 32(7)
2．論文標題 日本語教育学の課題に対して計量分析は何ができるか	5．発行年 2020年
3．雑誌名 計量国語学	6．最初と最後の頁 372-386
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 李在鎬	4．巻 29
2．論文標題 実践報告：理論研究科目「言語コーパス論」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 早稲田日本語教育学	6．最初と最後の頁 25-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小森和子	4．巻 88
2．論文標題 中国語母語話者による和製漢語の意味推測と習得の関係―未習者と学習者の比較を通して―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6．最初と最後の頁 41-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小森和子	4．巻 11（1）
2．論文標題 日本語の学習経験がない中国語母語話者は和製漢語をどのように意味推測するのか	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 101-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 李在鎬	4．巻 32（3）
2．論文標題 BCCWJの学校教科書コーパスの計量的分析――日本語教育のためのリーダビリティと語彙レベルの分布を中心に	5．発行年 2019年
3．雑誌名 計量国語学	6．最初と最後の頁 147-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 LEE, Jae-ho and HASEBE, Yoichiro	4．巻 —
2．論文標題 Readability measurement of Japanese texts based on levelled corpora.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Japanese language from an empirical perspective: Corpus-based studies and studies on discourse.(Irena Srdanovic and Andrej Bekes(eds.))	6．最初と最後の頁 143-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 黄叢叢・玉岡賀津雄・小森和子・毎育新	4．巻 27
2．論文標題 中国人日本語学習者による連語習得に関わる背景要因	5．発行年 2020年
3．雑誌名 小出記念日本語教育研究会　論文集	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 小森和子	4．巻 11(1)
2．論文標題 日本語の学習経験がない中国語母語話者は和製漢語をどのように意味推測するのか（寄稿）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 101-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 柳澤絵美・小森和子・菊池 富美子・渡辺 晴世・安高 紀子・奥原 淳子・岩元 隆一	4．巻 11(2),
2．論文標題 課題遂行型の活動を取り入れた日本語教育の実践	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 133-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

１．著者名 小森和子・早川杏子・三國純子	４．巻 9
２．論文標題 中国語母語話者は和製漢語を正しく意味推測できるのか　－日本語未習者への調査から－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国語話者のための日本語教育研究	６．最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計39件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 伊集院郁子・小森和子・安高紀子・髙野愛子・李在鎬
２．発表標題 ライティングの評価再考：機械と人間の役割と今後の教育支援
３．学会等名 CASTEL/J（日本語教育支援システム研究会）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊集院郁子・李在鎬・小森和子・髙野愛子・野口裕之
２．発表標題 作文評価のための教師用ルーブリックの作成と試用
３．学会等名 2021年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 李在鎬・伊集院郁子・青木優子・長谷部陽一・村田裕美子
２．発表標題 論理的文章の自動評価に関する研究ーアカデミック・ライティングへの貢献を目指してー
３．学会等名 2021年度日本語教育学会春季大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊集院郁子・髙野愛子
２．発表標題 ３つのステップで学ぶ日本語アカデミック・ライティング～中級日本語学習者から母語話者まで～
３．学会等名 凡人社オンライン日本語サロン研修会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊集院郁子
２．発表標題 作文コーパスを用いた日本語教育研究ー母語話者と学習者の接続表現の比較ー
３．学会等名 外国語と日本語との対照言語学的研究
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊集院郁子
２．発表標題 作文コーパスの構築から評価研究へ：作文評価の普遍性と多様性を探る
３．学会等名 学習者コーパス国際シンポLCSAW5（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 李在鎬
２．発表標題 計算モデルは，人の評価にどこまで近づけられるか
３．学会等名 学習者コーパス国際シンポLCSAW5（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 李在鎬
２．発表標題 機械学習に基づく話し言葉と書き言葉の特徴分析
３．学会等名 第二言語習得研究会第31回全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 李在鎬，伊集院郁子，青木優子，長谷部陽一郎，村田裕美子
２．発表標題 I-JASを用いた習熟度と接続詞の使用に関する調査―論理的文章執筆の支援システムの構築
３．学会等名 計量国語学会第64回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 李在鎬
２．発表標題 論理的文章作成を支援するウェブシステムの構築について
３．学会等名 第33回日本語教育連絡会議
４．発表年 2020年

１．発表者名 野口裕之，大隅敦子，熊谷龍一，島田めぐみ
２．発表標題 CEFRの日本語への適用可能性ー産出的言語活動および（言葉の）やりとりの場合ー
３．学会等名 日本語教育学会2020年度春季大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 島田めぐみ，大隅敦子，熊谷龍一，董博，野口裕之
２．発表標題 国外日本語教育機関における Can-do statements と CEFR能力記述文の間の項目困難度比較ー受容技能を例にー
３．学会等名 日本語教育学会2020年度春季大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊集院郁子・小森和子
２．発表標題 「良い」意見文と「ふつう」の意見文を分ける要因は何かーテクストの論理性の質的分析を通してー
３．学会等名 日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊集院郁子・李在鎬・青木優子・長谷部陽一郎・村田裕美子
２．発表標題 複数のコーパス分析に基づく接続詞使用と作文トピックの関係性
３．学会等名 専門日本語教育学会第22回専門日本語教育学会研究討論会
４．発表年 2020年

１．発表者名 菅長理恵・中井陽子・伊集院郁子
２．発表標題 留学生のキャリア形成を考える－日本で研究者として活躍する元留学生の事例より－
３．学会等名 中国赴日本国留学生予備学校創設40周年中日両国言語教育及び文化交流シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 李在鎬
２．発表標題 教科書に対する読みやすさの評価 ― jReadability と BCCWJ を用いて―
３．学会等名 MHB研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 李在鎬，長谷部陽一郎
２．発表標題 Implementation of Data Visualization Features for Japanese Writing Support System “jWriter”（データ可視化ツールを利用した作文支援システム「jWriter」）
３．学会等名 CASTEL/J 2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 李在鎬・伊東祐郎・鎌田修・六川雅彦・坂本正・嶋田和子・由井紀久子
２．発表標題 口頭能力と自己評価の関連性（Relationship between Oral Proficiency and Self-assessment）
３．学会等名 第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 黄叢叢・小森和子
２．発表標題 中国語母語話者の和製漢語の習得における母語の影響 ―未習者と既習者の比較を通して―
３．学会等名 中国語話者のための日本語教育研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小森和子
２．発表標題 日本語の慣用表現
３．学会等名 湖北民族大学日本語科特別講義（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小森和子
２．発表標題 中国語を母語とする日本語学習者の語彙習得に及ぼす中国語の影響
３．学会等名 大連外国語大学学術講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小森和子
２．発表標題 日本語か英語か？　和製英語の習得
３．学会等名 南京林業大学特別講義（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野口裕之・大隅敦子・熊谷龍一・島田めぐみ
２．発表標題 CEFRの日本語への適用可能性－受容的能力の場合－
３．学会等名 日本テスト学会第17回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 安永和央・野口裕之
２．発表標題 国語の記述式問題における評価基準の検討－評価基準の段階数に着目して－
３．学会等名 日本心理学会第83回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 熊谷龍一・野口裕之
２．発表標題 複数冊子における素点を用いたDIF検出方法について－CEFR descriptors質問紙を用いた検討－
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 葦原恭子・塩谷由美子・島田めぐみ・奥山貴之・野口裕之
２．発表標題 高度外国人材に求められる「仲介」スキルとは－CEFR2018補遺版におけるmediationの 分析を通して－
３．学会等名 沖縄県日本語教育研究会第17回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊集院郁子・李在鎬・小森和子・野口裕之
２．発表標題 意見文に対する評価コメントの計量的分析―コレスポンデンス分析に基づく考察―
３．学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小森和子・李在鎬・長谷部陽一郎・鈴木泰山・伊集院郁子・柳澤絵美
２．発表標題 教師による評価とコンピュータによる自動評価はどの程度一致するのか―中上級日本語学習者の意見文の評価を対象に
３．学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 李在鎬・伊集院郁子・小森和子
２．発表標題 決定木分析と共起ネットワークに基づく意見文へのコメント分析
３．学会等名 第29回第二言語習得研究会（JASLA)全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 櫻井千穂・真嶋潤子・中島和子・野口裕之
２．発表標題 DLA＜読む＞の構成概念妥当性の検証―テキストレベルの順位性をめぐって―
３．学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木泰山・柳澤絵美・小森和子・李在鎬・長谷部陽一郎
２．発表標題 日本語クラスレベル分けのためのオンラインテストシステムの開発―日本語学習者作文評価システムjWriterを用いた作文評価の導入―
３．学会等名 日本教育工学会第34回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊集院郁子
２．発表標題 評価結果に基づく意見文の特徴―評定値・評価コメント・意見文の分析―
３．学会等名 作文研究2018
４．発表年 2019年

１．発表者名 小森和子
２．発表標題 意見文に対する自動評価と教師による評価の関係
３．学会等名 作文研究2018
４．発表年 2019年

１．発表者名 李在鎬
２．発表標題 読み書きを支援するウェブシステム
３．学会等名 作文研究2018
４．発表年 2019年

１．発表者名 野口裕之
２．発表標題 ラッシュ系モデルによる尺度構成―作文研究およびCEFR尺度の開発
３．学会等名 作文研究2018
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊集院郁子
２．発表標題 作文と評価
３．学会等名 「作文評価を考える」セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 小森和子
２．発表標題 作文評価を体験する
３．学会等名 「作文評価を考える」セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 李在鎬
２．発表標題 作文のコメント分析
３．学会等名 「作文評価を考える」セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 野口裕之
２．発表標題 評定値の分析
３．学会等名 「作文評価を考える」セミナー
４．発表年 2019年

〔図書〕　計9件

1．著者名 伊集院郁子・髙野愛子	4．発行年 2020年
2．出版社 アスク出版	5．総ページ数 168
3．書名 日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座	

1．著者名 李　在鎬	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 328
3．書名 データ科学×日本語教育	

1．著者名 李在鎬（児玉一宏，谷口一美，深田智（編））	4．発行年 2020年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 280
3．書名 はじめて学ぶ認知言語学―ことばの世界をイメージする14章（「コーパスの世界」執筆）	

1．著者名 李在鎬（池上嘉彦，山梨正明（編））	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 420
3．書名 認知言語学 I（講座：言語研究の革新と継承 4）（「用法基盤モデル」執筆）	

1．著者名 島田めぐみ，野口裕之	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 115
3．書名 統計で転ばぬ先の杖	

1．著者名 池上嘉彦・山梨正明（編）山梨正明、﨑田智子、堀江薫、金杉高雄、守屋三千代、李在鎬、小松原哲太、安原和也、澤田淳、米山三明、杉本孝司、仲本康一郎、井上京子、黒滝真理子、吉村公宏、森雄一（著）	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 420
3．書名 認知言語学 I（講座：言語研究の革新と継承 4）	

1．著者名 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）	4．発行年 2020年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 255
3．書名 本語学習者コーパスI-JAS入門：研究・教育にどう使うか	

1．著者名 鎌田修・嶋田和子・三浦謙一（編）牧野成一・奥野由紀子・李在鎬（著）	4．発行年 2020年
2．出版社 凡人社	5．総ページ数 264
3．書名 OPIによる会話能力の評価―テスティング、教育、研究に生かす―	

１．著者名 李　在鎬、石川　慎一郎、砂川　有里子	４．発行年 2018年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 304
３．書名 新・日本語教育のためのコーパス調査入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

作文評価のための研究グループ
http://jhlee.sakura.ne.jp/sakubun/
伊集院郁子個人ホームページ
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小森　和子 (Komori Kazuko) (60463890)	明治大学・国際日本学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	李　在鎬 (Lee Jae-ho) (20450695)	早稲田大学・国際学術院（日本語教育研究科）・教授 (32689)	
研究分担者	野口　裕之 (Noguchi Hiroyuki) (60114815)	名古屋大学・教育発達科学研究科・名誉教授 (13901)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高野　愛子 (Takano Aiko) (30771159)	大東文化大学・外国語学部・准教授 (32636)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	安高　紀子 (Ataka Noriko) (80938431)	明治大学・国際日本学部・特任講師 (32682)	『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』執筆協力

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 「作文評価を考える」セミナー（於：台湾　東呉大学）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 作文評価セミナー（於：中国　大連外国語大学）	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関